

2012 年度 東京蜘蛛談話会 12 月例会

1. 日時 2012 年 12 月 2 日(日) 10 時より(開場 9 時 30 分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒150-0011 東京都渋谷区東 2-5-3
「JR 渋谷駅」東口(東急文化会館側)より、「学 03 日赤医療センター行」バスにて約 5 分、「國學院大學前」下車、徒歩 1 分、170 円
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター、OHP 等用意いたします。
5. 講演をご希望の方は、演題と使用希望機材
(スライド、OHP、コンピュータ)
を事務局初芝までお知らせください。

〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 有限会社エコシス 初芝伸吾
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp
Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

- 渋谷駅東口から徒歩 15 分です。坂道がありますので、バスを利用の方がよろしいかと思います。
- 東京環境工科専門学校及びその周辺には駐車場ありません。



東京環境工科専門学校

東京蜘蛛談話会 2012 年度採集観察会

1. 期 日： 第3回 2012年10月14日（日）第4回 2013年2月10日（日）
2. 場 所： 神奈川県小田原市いこいの森・わんぱくランド
3. 集 合： 東海道線小田原駅西口（新幹線側）を出たところのバス停
午前10時20分発「いこいの森」行きバスに乗車します。
所要15分，終点下車。
4. 世話人： 池田博明
携帯 TEL：090-9670-1525（ほとんど携帯していませんが）

※ バス料金は片道280円。バスは1時間に1本しかありません。わんぱくランド（こども遊園地）は樹高5mでのムツトグイセキグモの発見地です。観察コースはわんぱくランドを横断して「いこいの森」へ入り、「いこいの森」からバス停へ戻る予定です。

ゆうすけ美術館

新 海 明

2000年ごろ，関西クモ研究会の機関誌「くものいと」が全面リニューアルされた。当時は足繁く関西の例会などに参加しており，このリニューアルを進めた梶元智子さんや船曳さんらと雑誌の企画などをあれこれと話し合っていた。「次の号はどんな企画にしようか」など，帰りのバスや電車の中でも篤く語り合っていたのを思い出す。出来上がった「くものいと」の目次を眺めればわかるように，実にさまざまな内容に富んだ面白い雑誌に仕上がっていた。谷川さんと「キシダイアもうかうかとしていられないね」と話し合ったものだ。

この新しくなった「くものいと」で目を引くコーナーがあった。「ゆうすけ美術館」だ（ちなみに同じ号に，今ではキシダイアの常連の投稿者となった西野真由子さんが中学2年生のときに日本学生科学賞で内閣総理大臣賞を受賞した記事も紹介されている）。ゆうすけ美術館の作者池田勇介君が例会の合間に描いた「ミズグモ」や「サソリとクモのたいけつ」の絵の紹介だった。当時小学校入学前の幼児は，その後，瞬く間にその才能を開花させていった。2002年には津堂城山古墳のフィールドの紹介とそこで採集されたクモの記録をお父さんとの連名で書き，2004年には単独で浜寺公園のクモのリストを報告している。そして2007年には「大阪府のクモ」を発表するまでになった。私がもっとも思い出深いのは2008年に「くものいと41号」に掲載された「ライバルよ，頑張れ」と「ライバル???おっさんこそ頑張れ」の親子掛け合いの文章だ。このころ，勇介君とお父さんは東京クモ談話会の合宿にもたびたび参加されるようになっていた。

のだ。夜間観察会が終わった後に開かれるクモ合わせの席上で、勇介君は谷川さんの前に正座して「篩板類は単系統群ですか」などと質問をしていたそうである。小学校から中学校にかけてのころですよ！そして、その光景を横手に見ながら、私はお父さんとお酒を酌み交わしながら四方山話をするのが常であった。話の端々に子と思う親の気持ちが滲んでいたように思う。長野県女神湖で行われた合宿では弟の亮太君と二人きりで参加した。亮太君は兄貴が採集で夢中になっていたときに取り残されていた。そんな様子は私の少年時代と重なったのだ。私も幼い時分はクモなどに興味はなかった。「兄貴は今、クラシックにも凝っているんだ」と聞いたのは、このときだったと記憶している。



ライバル

毎年暮れに開かれる関西クモ研究会の例会に、私はここ 2 年間仕事の関係で参加できなかった。参加した谷川さんによって 2010 年はお父さんだけが出席し、2011 年は二人とも出席していなかったと聞いた。やはり、思春期を一途に一本道に過ごすには無理があるのだろうと思った。私の経験からも言えた。そして、私は心配よりも安堵の念を感じていた。若いときは、いっぱい寄り道をしなさい・・・と。でも、心の奥底では「でも、いつかクモの世界に戻ってきてほしいナァ」と願っていた。

毎年暮れに開かれる関西クモ研究会の例会に、私はここ 2 年間仕事の関係で参加できなかった。参加した谷川さんによって 2010 年はお父さんだけが出席し、2011 年は二人とも出席していなかったと聞いた。やはり、思春期を一途に一本道に過ごすには無理があるのだろうと思った。私の経験からも言えた。そして、私は心配よりも安堵の念を感じていた。若いときは、いっぱい寄り道をしなさい・・・と。でも、心の奥底では「でも、いつかクモの世界に戻ってきてほしいナァ」と願っていた。

この願いは 2012 年 5 月 1 日に一瞬で潰えてしまった。この日、私は仕事に出かけていた。家に戻ると 2 本の留守電があった。谷川さんと柘元さんからだった。「4 月 29 日。池田勇介君が亡くなった」との連絡だった。「えっ。いったい何があったの」。私にはわけがわからなかった。5 月 3 日。大阪八尾市の葬祭場にはたくさんの同級生が参列していた。そこに吉田 真・田中穂積・加村隆史・谷川明男といった錚々たるクモ学者も参列していた。一高校生の葬儀にこれほどの方々が集まったのは、やはり、彼にそれだけの才能を感じ取り、その将来性に期待を寄せていたからに他なるまい。私もその一人だ。が・・・いくら嘆いても彼はもうこの世にいない。それなりの年配者が亡くなるのだったら「仕方ない・・・か」と諦められるが、二十歳にも満たない若者が逝くのは忍びなさ過ぎる。ご家族の心中は察するに余りある。

ゆうすけくん。天国で思う存分クラシックを流しながらクモの研究に勤しんでください。そう遠くないうちに、われわれも後から駆けつけますから。そして、またあれこれとクモ談義に花を咲かせましょう。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 安田明雄 〒231-0861 横浜市中区元町 5-219

TEL : 045-641-0763 E-mail : kobato@gol.com

コガネグモがやってきた

加藤 康子

五月の連休明け、クレマチスの花の下に大きなコガネグモがいるのを発見。



やったあ！ あこがれのコガネグモが 我が家にやってきたのだ。周辺では一度も見たことの無いコガネグモが庭に来てくれて、わくわくが止まらない。立派な姿をしているが、体の色もあまり濃くなくて、まだ若いようだ。獲物に突進するときの敏捷さがすごい。素早く糸で丸めて、中央のこしきに戻るときは網の上を一足跳びにピョーンと跳んだ。

元気いっぱい、かくれおびも勢いにまかせて、コテコテの編み込みだ。もしかして凝り性のクモなのかなあ。

空間が狭すぎるのか網は一枚ではなく、正常円網の前面に不規則な糸が渡されて立体的になっている



三週間も過ぎた頃、朝、網が破られて、クモが消えた。すずめ蜂が飛んでいたもので、狩られてしまったのか。どこへ行ったのだろう。落胆して庭の木々を見上げる日々が過ぎた。

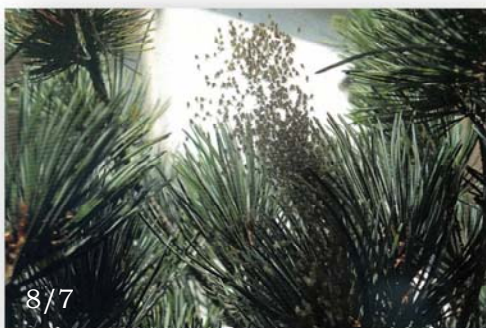


突然、北側の松の上に彼女は姿を現した。身体は黒々と逞しくなり、網の大きさは70センチ以上ある。堂々として強さを誇示するかのよう、青空の下で長い足

それから姿が消えたり、松の葉先にぶら下がって、じっと動かずにいたり、やきもきすることがあったが、高い木の上で観察できないでいた。

どうやら、彼女は母になっていたらしい。姿が見えなくなっても、卵のうの存在に気づかずにいたが、なにげなく見上げたとき葉の間に子供達のまどいがあったのだ。決心して梯子に登り写真を撮った。

「コガネグモのお母さんありがとう」



四日後には松の枝に子供達の姿は無く、空っぽの卵のうだけが揺れていた。もう旅立ってしまったのか。子供達の身体は小さくて、今、私の眼で探すことはできないけれど、来年の夏、庭のあちこちにコガネグモが並んでいたら、どんなに幸せだろうと想像してみる。

ナガコガネグモもやってきた

プルーンの葉陰に、ナガコガネグモの幼体が、ギザギザの小さなかくれおびの中にいる。誰にも話さず秘密にしておきたい発見。

しばらくすると、上下に慎ましく整ったかくれおびを編んだ。細い小さな身体は、白い妖精のようにかわいらしい。狭い庭の通路を通ると身体をゆすって敏感に反応する。消えたかなと思うと、思いがけない場所に網を張っていたりしていたが、ある日成長した姿となってプルーンの枝に帰ってきた。透きとおるようだった身体は、黄色と黒の縞模様になり、太陽にキラキラと輝いている。





姿形がバランスよく、しなやかに整っているのはコガネグモだと思うが、色彩の美しさにかけては、ナガコガネグモの方が軽やかでロマンティックな配色で、思わず見とれてしまう。ふわりとした肉感的美人というところだろうか。

しかし獲物をつかまえに行くときの敏捷さは、コガネグモと同じで、小さなバッタなどは、体液を吸うというよりは、モグモグと食べてしまっているように見える。

網の隅に雄が来ているなんて思っていたらそのうちにプクプクの妊産婦グモとなり、動きもゆるやかに重々しい。



金色のちりちりとした糸で囲むように守られた巾着形でベージュと茶の縦縞模様の、おしゃれな卵のうが葉陰にぶら下がっている。素晴らしい作品だ。「ナガコガネグモ母さんありがとう」



次の朝見ると、腹部はぺちゃんこになり、全体的に身体の色が濃くなり黄色が赤味を帯びて、一晩で、すっかりやつれてしまっていた。彼女は母になったのだ。周囲を探すと... あった！！



プルーンの木には他のナガコガネグモの卵のうも合わせて3つの巾着がついている。

子供達のまどいができるのを待っている。この暑さの中、元気な子供達が出てきてくれますように

「架空」課題研究報告作成法

池 田 博 明

高校生の課題研究や大学生の卒業研究に適当なクモの研究の相談を受けることがある。その際に課題研究の効果的な進めかたとして、私が進めるのは「架空の」課題研究報告作成である。

ふつう研究報告は実験や調査が終了してからデータをもとにして書きはじめるものである。しかし、私が推奨する方法は調査や実験を始める前に報告書を書きあげてしまえという「乱暴な」方法である。

何もしていないうちに報告が書けるものだろうかといぶかしむ人もいると思う。しかし、その考えは間違いだ。なにもしないほうが自由に結果まで書けるし、考察もきちんとできるのである。つまり研究前にこそ「架空」報告書は矛盾なく書けるということなのだ。「ウソ」報告書の薦めであり、「デッチあげ」の薦めである。ちなみに、雑誌『たのしい授業』（仮説社）では小学校でウソの作文を推奨している。つまり、ウソを考えるのは楽しく創造的なワークショップなのである。

誤解する人がいるので断っておくが、この「**架空**」報告書を正しいかのように偽って公表してはいけない。自分が研究するための手引き、あるいは下書きとして作成するだけであって、実際には研究を進めながら、この架空の報告書を書き直して正していくことが必須なのである。つまり、架空の報告書とはプロトコルなのだ。筆者は高校生の課題研究で架空報告指導法を実践したことを記しておく。

どう作成するのか分からないという人のために「架空」報告書の例を提示した。これはあくまでも「**架空**」報告、つまり「**ウソ**」報告である。「ウソ」の部分は下線で示した。実際の研究を進めながらこの下線の部分を書き換えていこうという方法である。途中で全面的に書き換えなければならない場合もあるだろうが、そんなときこそ事前に予想もしなかった新たな発見の契機なのである。

「**架空**」研究報告例 オオヒメグモのトラップ・スレッドの更新

イケダ 博明

はじめに

クモの網に付された粘球の粘着力は乾燥するほど低下する。多くの円網種は短期間に網を更新し、粘球を付け替える。不規則網を張るオオヒメグモも粘球を付けたトラップ・スレッド trap thread を張り替えているはずだが、その頻度や数は未調査であった。

日本でオオヒメグモの網構造に関してくわしく報告したのは中平（1963）で、その後、ヒメグモ科のハンゲツオスナキグモの網について新海（1992）が、オオヒメグモ

様の網としてユウレイグモ科のシモングモの網について新海（1994）が報告しているが、網の更新に関する記録や報告はない。新海（私信）によると、ハンゲツオスナキグモとシモングモの網の図は模式図であって、糸の本数や粘球数は必ずしも正確ではないとのことだが、この「架空」報告では正確な図のように扱ってみた。

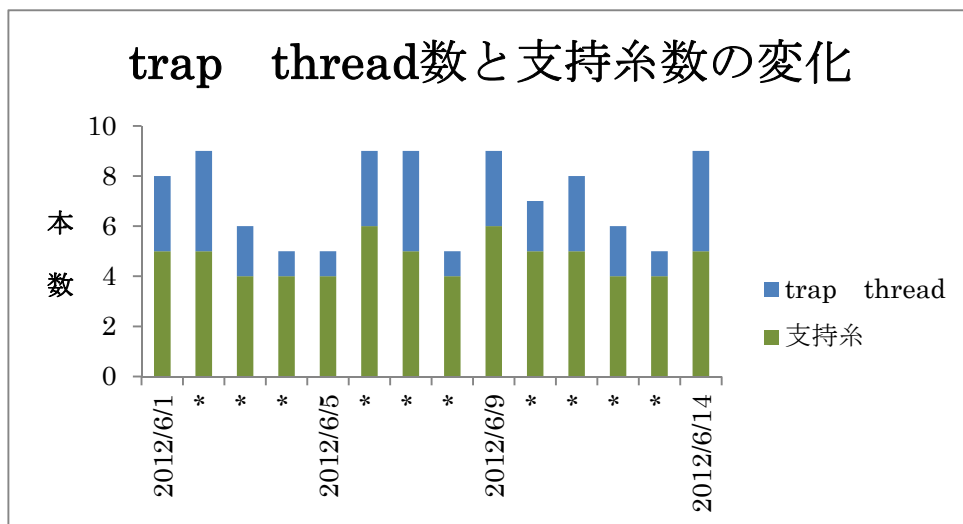
オオヒメグモの網を 2012 年 6 月から 8 月までの二ヶ月間に渡って調査した結果を「ウソ報告」する（実際には調査していません）。

材料と方法

自宅の屋内に造網するオオヒメグモのメス成体 2 頭の網を毎朝 7 時に、観察した。野外の個体はハモンヒメグモや一部のヒメグモ類（カグヤヒメグモやリュウキュウヒメグモ）との識別が困難なため、観察は屋内の個体でオオヒメグモに限定した。観察項目はクモのいる中心部から垂下するトラップ・スレッド（粘球付きの糸）の本数、粘球数、垂下支持糸（mooring thread 粘球の付いていない垂下糸）の本数、網の最大長と最大幅、クモの中心位置の下端から床までの高さとした。網は毎日、定位置からデジタルカメラで撮影し、記録とともに保管した。

調査結果

調査期間中のトラップ・スレッドの本数の平均値は、 $2.0+1.15$ 本（range 0-4），支持糸の本数の平均値は $4.7+0.62$ 本（range 3-6） だった。網のトラップ・スレッドは常に支持糸数よりは少なかった。トラップ・スレッドの粘球数はほぼ一定だった。粘球数の平均値は $5.6+0.56$ 個だった。網全体の垂糸数（trap threads + mooring threads）は9 本を上回ることが無かった。垂下支持糸の数はほぼ一定だったが、トラップ・スレッドが減ったときには同時に本数が減る傾向があった。最初の二週間の結果をグラフで示した。その後の経過も同様であった。

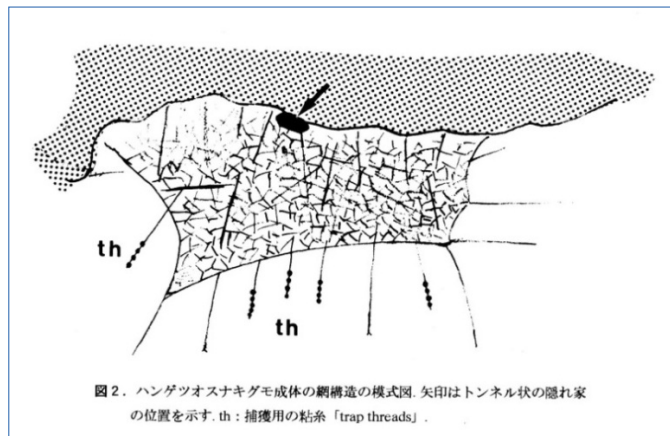
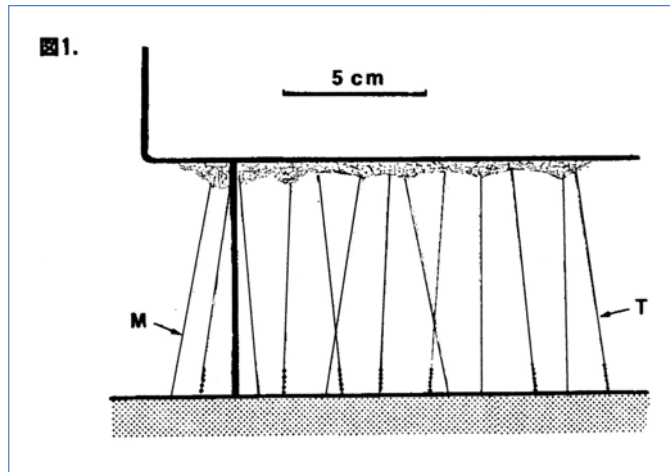


考 察

オオヒメグモの網構造について、中平（1963）はトラップ・スレッドは網の内側に、支持糸は網の外側に張られ、支持糸はトラップ・スレッドに比べて糸が太く末端が分岐していると報告している。それぞれの本数は報告していない。描かれた「網の模式図」では内側の糸が 6 本、外側の糸が 3 本、粘球数は 7 個である。

トラップ・スレッドに捕えられた獲物にオオヒメグモが投げつける粘球系に関しては有田（1969）が記録しており、有田の Fig.3 には第Ⅳ脚で引き出した投系に粘球が 21~24 個描かれている（糸の中央で折り曲げて獲物に付ける）。粘球付きの糸を投げつけた後で無粘球の糸を数回（図には 3 回）投げつける。

オオヒメグモの網糸はほぼ相同の型のシモングモ幼体の網の図（新海,1994 の図 1. 印刷では糸線が消えているため、デジタルで修復した）と比べるとトラップ・スレッドが少なかった（シモングモは 7 本）。支持糸はほぼ同じであった（シモングモは 6 本）。粘球数はほぼ同じであった（シモングモは 5-7 個）。ハングツオスナキグモ成体の網は図（新海, 1992 の図 2）に描かれている限りではトラップ・スレッドが 4 本、粘球数は 4-5 個であった。



オオヒメグモのトラップ・スレッドは毎日更新されていた。トラップ・スレッドと支持糸の数が減っているときは大抵の場合、虫がかかった後だからである。クモは虫を捕食後、虫がかかって切れたトラップ・スレッドや支持糸を張り直した。トラップ・スレッドが切れた後に張る糸は大抵トラップ・スレッドであった。このことからクモはトラップ・スレッドを張る位置を決めているに違いないと思われた。また、網全体の支持糸数がほぼ一定な理由も、支持糸の位置にはそれなりの意味があるからと考えられる。

要 約

オオヒメグモの網のトラップ・スレッドは毎日更新されていた。捕虫で切れた糸をクモは張り直すものの張り直すまでの間隔は一定していなかった。
支持糸の本数はほぼ一定していた。

参考文献

- 有田立身, 1969. オオヒメグモの粘球捕糸について. *Atypus*, 51/52:37-40.
中平 清, 1963. オオヒメグモの網に於ける捕虫機構（観察の反省）*Atypus*, 28 : 1-3.
新海 明, 1992. ハングツオスナキグモの網構造と餌捕獲行動. *Kishidaia*, 64:23-26.
新海 明, 1994. シモングモの網構造と餌捕獲行動について. ユウレイグモ科のクモは単性域類か. *Kishidaia*, 67:24-26.

注：この報告例は研究の進め方を紹介するためのものです。赤字の部分は架空のもので現実のデータではありません。決して引用などしないでください。

『毒グモ騒動の真実』 ないものねだり

池 田 博 明

全国農村教育協会から、清水裕行・金沢至・西川喜朗著『毒グモ騒動の真実』（2012年7月24日発行、1800円）が出版されました。副題「セアカゴケグモの侵入と拡散」と、帯の惹句「あれから約十五年、セアカゴケグモは列島各地で生息域を拡大し、別種のゴケグモも発見され、現在、二十三都道府県で五種が確認されている。マスコミ報道は絶え、毒グモの危険は去っていない」が本の内容を表しています。読みながら、1995年~1996年当時を思い出しました。そんな私の所感であって、書評ではありませんが、この本は労作でありながらも、修正加筆を必要とする箇所が多いと思いました。別に *Kishidaia*, 101号に欠落領域の補足解説を投稿しましたので、そちらを参考になさって下さい。清水氏によると再版の機会があれば修正補足の可能性もあるそうです。

1995 年 11 月 24 日に共同通信による情報が新聞記事になって以後の「毒グモ騒動」には東京クモ談話会や三重クモ談話会，中部蜘蛛懇談会，日本蜘蛛学会の会員の皆さんもいろいろな形で対応されました。

この本の第 1 章「セアカゴケグモの発見と波紋」には発見の経緯と 1995 年末までの経過が当事者（西川・金沢）からの証言なども元に記述されていて参考になります。ただ，記録が大阪に偏っており，ほとんど同時にセアカゴケグモが発見された当時の三重県四日市の状況や三重クモ談話会の会員の努力や適切な対策は資料が公表されている（太田，1996；三重クモ談話会，1996；1997；1998）にもかかわらず，記述や評価が不十分だと感じました。神奈川県横浜市のハイイロゴケグモの発見の経緯（Ono，1995；池田，1997）や，1995 年 12 月 16 日の東京蜘蛛談話会有志による横浜市ゴケグモ調査の活動についての記述は全く書かれていません。また，小野（2002）にはテレビ取材や放送と対策に関してオーストラリアの観光局の関与などの重要なことが報じられていますが，第 1 章にも第 4 章にも取り上げられていませんでした。

第 3 章「1996 年以降の分布拡大」は毒グモが認知されてから今日までのゴケグモ報道の経過の記録で，この本のもっとも重要な部分です。清水氏はウェブ上に「ゴケグモ情報センター」を開設して（開設日時は不明。親サイトの昆虫処理情報研究会は 2006 年開設），情報の収集・整理に当たっており，ウェブ情報を鵜呑みにすることなく確認していて，信頼に足る記録となっているものと思われます。ゴケグモ情報もニュース性が低くなったため地道な記録は大変だったと推察します。新たな地点での発見を役場に届け出たが，もはや問題にされなかったという事例も聞きました。完全を期すのは難しいようです。

第 2 章「ゴケグモとはどのようなクモか」は，ゴケグモの生物学的解説および毒の説明ですが，ゴケグモ類の生態記述は参考文献の明示がされていません。また，日本でのセアカゴケグモやハイイロゴケグモの生態では，クモ同好会誌などに発表されている詳細な記録（特に三重クモ談話会，1996；1997；1998）やセアカゴケグモ報告書（ニュージェック，1997；大阪府立公衆衛生研究所，1998）のデータを取り上げるべきだったのではないのでしょうか。池田（編）『クモ生理生態事典』のセアカゴケグモやハイイロゴケグモの記述もまったく参考にされていません。「セアカゴケグモの学術文献は少ない」と断言されていますが，洋書や英語の参考文献は多すぎて整理がつかないほどあります。

毒性に関する箇所では，ゴケグモ毒が他のクモ毒と混じって解説されています。どこまでがゴケグモの毒なのか不明瞭な書き方になっています。たとえばネフィラトキシンは毒素名からわかるようにネフィラ（ジョロウグモの）トキシン（毒素）であって，ゴケグモ毒ではありません。このような誤解をうむ記述は西川・金沢（1996）も同様で，「昆虫担当学芸員協議会ニュース」第 18 号（2009 年）も同文でした。ゴケグモが脊椎動物だけでなく昆虫の神経-筋接合部に働く毒素も持っているというのは事実ですが，

その毒素名はラトロ（ゴケグモの）インセクト（昆虫の）トキシシン（毒素）というタンパク質毒素のはずです。ゴケグモ毒素の解説や医学的な解説は、大利昌久やユーゴスラビアのマレティック、川合述史、中嶋輝躬などが詳細にしていますし、池田（2009）もあるのですが、それらは参考文献には挙げられていません。川合の一般書『一寸の虫にも十分の毒』（講談社、1997）は「毒グモの日本上陸」から始まる傑作なのですが、参照されていません。大利・池田（2006；2006）や大利・新海・池田（2006）は参考文献には挙げられていますが、まったく引用されていません。

第4章「社会現象としての「毒グモ騒動」」にはゴケグモ対策が書かれています。「クモ有識者は」「識者は」「クモ研究者は」といった表現で意見が一般化され、ときには批判されているのですが、著者らも「クモ有識者」なのに、他の誰のことを指しているのか、私には心当たりがありませんでした。当時、日本蜘蛛学会会長だった西川喜朗氏のもとより、庶務幹事の吉田真氏は学会で「ゴケグモ対策委員会」を立ち上げたり、情報収集に努めたりと本来の仕事そっちのけで苦勞されたはずですが、なにひとつ記述されていませんし、評価もされていません。小野（2002）の「クモ全般の情報を提供するために、プロ、アマを問わずクモの研究者がみな狩り出されることとなった。多くの蜘蛛学会の会員がマスコミや地元の住民、そして行政の質問に答えたり、手弁当で調査に参加した。とくにアマチュア研究家がはたした役割には大きいものがあつた」という評価こそ正しいものでしょう。このような評価が既にあることさえ記述されていません。不思議です。

また、1996年の日本蜘蛛学会の東京都国分寺市での第28回大会では、「ゴケグモを中心とした外来クモの生物学」と題してシンポジウムを開いています。クモ学会員のゴケグモに対する正確な知識をというニーズに応えた企画で「毒グモ騒動」の渦中にあつたクモ関係者が企画・立案に関わっていました。シンポジウムの内容と要旨は日本蜘蛛学会会誌 *Acta arachnologica*, 45(2):187-188.に掲載されていますが、このシンポジウムのことも記述がなく、評価もされていません。各個人の講演要旨は参考文献に挙げられていますが記述には生かされていません。また、セアカゴケグモの毒に関する検査では1996年にラトロトキシシンが検出されていますが、この本には「衛生研究所による安全論」が中心で、そのことがきちんと書かれていません。

第5章「外来生物としてのゴケグモとの付き合い方」では、セアカゴケグモが身近なクモとして定着した現在は妥当な提案がされていると思います。一般の人でもクモの生態をよく知ってスズメバチと同様の付き合い方を学ぶべきだろうという提案です。ただし、同じ提案は当初からクモ関係者がしていたことをきちんと評価すべきではないでしょうか。証拠資料も証言も公表されています。

第6章「クモと日本人」は壮大なテーマですが、素人の論説はファンタジーです。古代日本の音韻学や言語学に精通していない素人が論じても見当はずれになりがちです。著者にはそれなりの見解があるでしょうし、ファンタジーを論ずる自由もあるとは思ひ

ますが、私には例えば“『古事記』ではつちぐもを「土雲」と表記している．発音がひとり歩きした結果であろう”（146 頁）という推論がどうして成り立つのかが理解できませんでした．ひとり歩きもなにも、『古事記』の和語の漢字表記は最初から音に当てた当て字ですから．橋本進吉の名著『古代国語の音韻について』（岩波文庫）を読んでみて下さい．

参考文献とその＜内容＞

池田博明,1997.神奈川の毒グモ,ハイイロゴケグモの例. かながわの自然,(59):34-35.

＜ハイイロ発見の記録＞

池田博明, 2009. クモの毒を科学する. *Biophilia*,5(1):1-5. ＜医系理科系大学 1～2 年生用のクモ毒の解説＞

大阪府立公衆衛生研究所, 1998. セアカゴケグモの調査報告書. 大阪府立公衆衛生研究所. ＜詳細な報告＞

太田定浩, 1996. 四日市で発見されたセカゴケグモの現状. 中部蜘蛛懇談会研究会資料. ＜初動の記録＞

大利昌久・新海栄一・池田博明, 1996. 日本へのゴケグモ類の侵入.*Med.Entmol.Zool.*, 47(2):111-119.

大利昌久・池田博明, 1996. 毒グモとその毒(1). 現代化学. (301) ; 54-60.

大利昌久・池田博明, 1996. 毒グモとその毒(2). 現代化学. (302) ; 30-36.

池田及び大利の関連資料は 1998 年からウェブ「SPIDER DATA」上に公開されている

小野展嗣, 2002. クモ学. 東海大学出版会. ＜第 8 章に「セアカゴケグモ事件」＞

川合述史, 1997. 一寸の虫にも十分の毒. 講談社. ＜無類に面白い本で必読＞

ニュージェック, 1997. 都市地域における移入動物生息実態等調査-セアカゴケグモをモデルケースとして. 環境庁自然保護局・ニュージェック. ＜日本蜘蛛学会ゴケグモ対策委員会の最終報告書を兼ねた. 大阪が主. ＞

西川喜朗・金沢至,1996.セアカゴケグモの発見とその毒性に対する対策. 環動昆,7(4) : 214-223.

三重クモ談話会, 1996. 四日市のセアカゴケグモを追う. しのびぐも, (24) ; 8-22.

＜太田 1996 の改稿＞

三重クモ談話会, 1997. その後の四日市のセアカゴケグモ. しのびぐも, (25) ; 17-25.

＜生態記録＞

三重クモ談話会, 1998. 四日市のセアカゴケグモの野外調査を終えて. しのびぐも, (26) : 11-20.

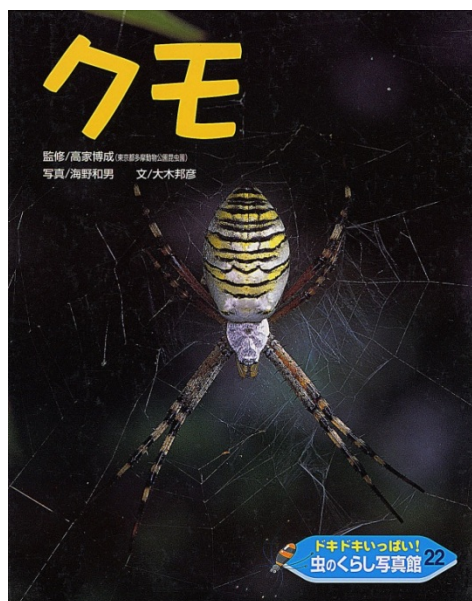
Ono, H., 1995. Records of *Latrodectus geometricus* (Araneae: Theridiidae) from Japan. *Acta arachnol.*44(2):167-170. ＜ハイイロゴケグモの発見に関する記録. 池田（1997）と重なる＞

クモが出てくる子どもの本情報 (10)

2005, 09 年に出版された写真絵本 2 点の紹介

萩野 康 則

今回は 2005 年と 2009 年に出版された写真絵本 2 点を紹介させていただく。



高家 博成（監修）・海野 和男（写真）・大木 邦彦（文） ドキドキいっぱい！虫のくらし写真館 22「クモ」 A4 変判/39pp. ポプラ社 2005 年 3 月 発行 ISBN 978-4-591-08457-1 本体 2,450 円

ポプラ社から 24 点刊行されている「ドキドキいっぱい！虫のくらし写真館」シリーズ中の 1 点である。このシリーズは、小学校低・中学年向けに「虫に興味をもちはじめたこどもに、身近な虫の生態を貴重な写真とやさしい文章で紹介」（各巻末尾の紹介文より）するもので、24 点のラインナップはカブトムシ、モンシロチョウ、トンボ、バッタ、アリ、セミ、テントウムシ、カマキリ、クワガタムシ、アゲハチョウ、ミツバチ、ホタル、コオロギ、アメンボ、カ、ダンゴムシ、カメムシ、ゲンゴロウ、オトシブミ、ナナフシ、ウスバカゲロウ、クモ、ゴキブリ、カタツムリである。ダンゴムシの巻は出版後すぐに入手したが、クモの巻については、うかつにも最近までその存在に気付かなかった。価格がやや高めだが、図書館用の堅牢製本で、表紙にフィルムも掛かっているの、やむを得ないだろう。

クモの網はどんなところにあるか、クモのからだのつくり、網の張り方、かくれ帯、捕食、糸の使い方（ジグモ、クサグモ、ゴミグモ、ヤチグモが登場）、交接、産卵、孵化～まどい～分散を、ナガコガネグモを中心に、鮮明な写真と多めの文章で解説している。全国に分布していて、人家周辺でも普通に見られるナガコガネグモを選んでいるので、子どもたちがこの本に載っているクモに容易に出会えることになる。これは大変良心的で賢明な選択だと思う。末尾には「どれだけしってる？クモのなかま」として「日本のクモ」（普通種中心）と「海外のクモ」（形態の面白い種中心）を各見開き 2 ページで紹介している。さらに「クモを観察しよう」として採集法、飼育法、簡単な実験例を各見開き 2 ページで説明しており、写真と解説文でクモに興味をもった子どもが、実際にクモに接してみるきっかけを与えている。

さて、この「海外のクモ」中に「スコーピオンスパイダー」という名前で、マレーシ

ア産のクモ 2 頭 (1 頭は茶色, もう 1 頭は緑色) の写真が載っており, 一見オヒキグモ属のクモに見えるのだが, 説明には「長くのびたあたまの先をまげて」と書かれているのである. そして確かに, 茶色の個体の方は, 脚の付き方や腹部と思しき部分の形から, 尾のように伸長した部分はからだの後方ではなく前方に向いているように見える. ところが, Google で「スコーピオンスパイダー」「scorpion spider」などと入力して画像検索しても, ヒットするのは (たいていはウデムシやヒョケムシか, 架空の未来生物の画像が多いのであるが, その中に散見されるクモは) オヒキグモ属のものばかりで, 伸長部は腹部後方から出ているのである. すわ, 海野さんしか見ていない未記載群か, とも思ったのだが, マレーシアでこんな目立つクモが未発見, というのも考えにくい. そこで「困ったときの谷川さん頼み」ということで, 当該ページをスキャンして谷川明男さんにお送りして見ていただいた. その結果, 何と, ゲホウグモ属のクモであることが判明した. そして谷川さんの仰せに従って「*Poltya idae*」と入力して画像検索したところ, 出てくる出てくる.... 茶色いのも緑色のもあった. ただし谷川さんによれば, 画像だけでは *idae* かどうか判定できないとの由. さらにネットで調べたところ, *Poltya idae* は和名「ヒョウロクゲホウグモ」, 中国名「枯葉尖鼻蛛」, 英名「Elephant Spider」とのことである. また, 成体は茶色で枯葉に擬態, 幼体は緑色で生葉に擬態, という情報も見つかった. さらに, 池田博明さんから「スコーピオンスパイダー」はオヒキグモ属のクモを指す, との情報をいただいた.

このような訳で, このクモは「長くのびたあたまの先をまげて」いるのではなくて「前に長くのびたおなかの先をまげて」いるのであり, また「スコーピオンスパイダー」ではなくて「エレファントスパイダー」と呼ぶべきである, ということが判った.

「海外のクモ」中にもうひとつ, 胡散臭いクモが取り上げられている. 「ジンメングモ」と称して, 全身鮮やかな黄色地に黒い斑紋のあるカニグモの写真が載っているのだが, よく見ると眼域に眼が無いし, 体全体が全く無毛で, 不自然に光沢がある. また, 斑紋もいかにもペイントしたような感じがする. つまり本物のクモではなく, 作りもののクモに見えるのだ. インターネット全盛の現代, もしこんなクモが実在するならば, 画像検索すればヒットしそうなものだが, 「ジンメングモ」「人面グモ」「man faced spider」等で検索しても, 引っ掛かるのはハナグモ類やハワイのニコヤカヒメグモ *Theridion grallator* ばかりである. やっと 3 件見つかったが, 奇妙なことにそれらは全て, クアラルンプールの昆虫園に展示されているらしい, このクモの写真パネルを撮影した画像なのである. そしてそのパネルと本書に載っている写真が, トリミングは微妙に違うものの, 背景といいクモのポーズといい, 同一の写真に見えるのである. 念のため, この画像も谷川さんに見ていただいたが, 私と同意見であった.

従って, この「ジンメングモ」の写真は, クモ生体ではなくて, 作りもののクモの写真だと考えられる. 当該画像は, 例えば懐かしのみるかし姫のサイト <http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Namiki/3684/fact.html> の一番下の方に,

「マレーシアの人面クモ(カニグモ科)」として載っている。このクモについて何か情報をお持ちの方は、ご教示いただけると幸甚である。

高家博成さんは元多摩動物公園の昆虫飼育係長で、NHK ラジオ「夏休み子ども科学電話相談」や TBS ラジオ「全国こども電話相談室」の回答者も務められている方である。本シリーズ全巻の監修を担当されているほか、「あめんぼがとんだ」(横内襄/絵, 新日本出版社, 1991 年), 「かわいいむしのえほん」シリーズ (1998~2002 年) 「かわいいいきもののえほん」シリーズ (2007 年~, いずれも仲川道子と共作, 童心社) など, 子ども向けの昆虫関連の著書も多数ある。

写真の海野和男さんは, 今さら言うまでもなく, 栗林慧さんと双璧をなす日本の昆虫写真家の第一人者であり, 日本自然科学写真協会会長, 日本昆虫協会理事をつとめられている。本稿を書くにあたり経歴を調べて初めて知ったのだが, 東京農工大学の日高敏隆研究室で昆虫行動学を学ばれている方なのである。広角レンズを使った接写により, 昆虫と風景が一体となった写真が得意とされている。主な著作に 1994 年日本写真協会年度賞を受賞した「昆虫と擬態」(1993 年), 「蝶の飛ぶ風景」(1994 年, 以上平凡社), 「蛾蝶記」(福音館書店, 1998 年) など多数。また, 「デジタルカメラによる海野和男の昆虫撮影テクニック」(誠文堂新光社, 2012 年) など, ご自身の撮影テクニックを惜しげもなく開陳した昆虫写真撮影法に関するガイドブックも多数書かれている,

文の大木邦彦さんは, 出版社, 出版プロダクション勤務を経て, 編集プロダクションを設立され, 主に児童書・自然科学書の企画・編集・執筆を行っている方である。本シリーズ「ドキドキいっぱい! 虫のくらし写真館」の 9 巻以降は全て大木さんが文を担当されているほか, 「これなんだ? しぜんのふしぎなカたち」シリーズ(今泉忠明ら/監修, ポプラ社, 1997 年) の文などの著作がある。



新開 孝(写真・文) ふしぎいっぱい写真絵本 16「クモのいと」

A4 変判/35pp. ポプラ社 2009 年 5 月発行 ISBN 978-4-591-10954-0
本体 1,200 円

世間一般で「シンカイ」と聞いて連想されるのは「深海」であろう。しかし当談話会では栄一さん・明さんの「新海」ご兄弟を指す。そして昆虫写真の世界には「新開」孝さんという、もうひとりの

「シンカイ」さんがおられる。その新開孝さんが書かれたのが本書「クモのいと」で, 2012 年 6 月現在で 19 点刊行されている, ポプラ社の「ふしぎいっぱい写真絵本」シ

リーズ中の 1 点である。

雨上がりのドヨウオニグモの網に水滴が光っている様子から始まり、以降、コガネグモを中心に、造網、捕食、産卵、卵のう、孵化～まどい～分散の様子を、写真と簡潔な解説文で紹介している。この解説文は本当に短く、文章というよりは写真のキャプションに近い。途中、チュウガタシロカネグモやナガコガネグモなど、コガネグモ以外の 6 種の網の外観、そしてアズチグモとコハナグモ（本文中では両者をあわせて「ハナグモのなかま」としている）、ハエトリグモの徘徊性種が引き糸を使用しているところなども示していて、丁寧に見れば確かに「クモ」ではなく「クモのいと」という本になっている。ただ、「クモのいと」と銘打つには、糸のインパクトがやや弱い。芥川龍之介の小説の子ども版と勘違いして注文される粗忽者もおられるかもしれないので、「クモのいと」など、別タイトルにした方が良かったのでは、と思う。

また、裏見返しにはヌサオニグモ、キヌアミグモ、ウデブトハエトリなど、16 種のクモ本体の写真も載っているが、これらと本文との関係が不明である。

この本に登場するクモとクモ網のうち、私には「同定」できないものについては、池田博明さんにご教示いただいた。なお、Amazon のサイトで本書を検索して、最下部までスクロールすると、その池田さんが「クモの円網の美しい生態写真が中心ですが・・・」というタイトルで書かれたカスタマーレビューが掲載されている。辛口ながら暖かみのある、池田さんならではの達意の書評なので、ぜひご覧いただきたい。

作者の新開孝さんは、愛媛大学農学部の昆虫学教室を卒業された方で、本紙先号で紹介した「暗闇の生きもの摩訶ふしぎ図鑑」の著者である見山博さんの後輩にあたる。教育映画の助手などの仕事を经たのちに、フリーの昆虫写真家として独立され、現在は宮崎県三股町在住である。著書に、本としてのデビュー作となった「ヤマユガ観察事典」

（小田英智/構成、偕成社、1998 年）、「珍虫の愛虫記」（北宋社、1999 年）、「うんちレストラン」（2006 年）、「いのちのカプセル まゆ」（2008 年、厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財平成 20 年度推薦作品）「じゅえきレストラン」（2012 年）などの「ふしぎいっぱい写真絵本」シリーズ（ポプラ社）中の 6 点、半自叙伝である「ぼくは昆虫カメラマン」（岩崎書店、2010 年）など多数ある。また、ご自身のブログ「ひむか昆虫記」（http://www.shinkai.info/himuka_blog/）に、身近な昆虫を中心とした画像と、それにまつわるエッセイ的な文章をアップされていて、ほぼ毎日更新されている。これは大変なことである。

ところで一般的に写真には、記録として留める「道具（手段）」という側面と、鑑賞にたえる「作品（目的）」という側面があるだろう。

我々素人は、昆虫写真家が撮影した芥子粒のような小さな虫の超クローズアップ写真や、飛翔中の虫を正面から撮った写真を見たときに「さすがプロだ。私にはとてもこんな写真は撮れない」と、素朴に驚嘆し、ため息をつく。私も昆虫写真の身上は、小さな被写体にいかに迫って大きく写すかと、動きの速い被写体の決定的瞬間をいかに画像に

留めるか、であると思っていた。そしてカメラマンもそのような作品を撮るために、テクニックをみがき、機材に改良を加える。ここでは、写真は「目的」となっている。

一方、新開さんの写真は、第一義的には「手段」である。生態の分からない虫に出会ったときに、その虫を知りたいという衝動に駆られ、フィールドに通い、場合によっては採集し飼育をして地道な観察を続ける。その観察の過程で、スケッチでは瞬間を切り取るのに間に合わないので道具として写真を用いた、というのが新開さんが昆虫写真を撮り始めた出発点である。そのような新開さんの昆虫写真には、超接写やストップモーションを極められた方々の写真のようなアピール性は余りないかも知れない。しかし、目の前で今繰り広げられている、誰も見たことのない生態を記録に留めよう、との意気込みで撮影された写真には、実に迫力がある。例えばアリの巣に住むアリスアブ、クモの卵のうに寄生するカマキリモドキ、奇妙なまゆを作るチビアメバチなど、決して珍虫ではないが、見てやろう、と思わなければ見ることのできない虫の不思議な生態を、みごとに示している。

実は私はこれまで、新開さんの本にはあまり接しておらず、栗林・海野両氏に続く中堅昆虫写真家のおひとりである、といった程度の認識しかなかった。ところが今回、多数の著作を見て読んで、印象ががらりと変わり、ファンになってしまった。本書の他にも、クモが登場する本が何冊もあるので、いずれ機会があればまとめて紹介したい

ラベルが読めない！

池田博明

2012年の高山合宿で水山栄子さんから国立科学博物館（つくば市）での標本整理の苦労話を伺った。A博士の古い標本はエタノールが飛んでいるのが多く、外国産の貴重（かもしれない）標本もありそうなのだが、復活不能だそうである。標本以上に問題なのがラベルで、紙自体が変色して判読不能、なんとか判読できたとしてもメモ程度の地名ではいったいどこのことか分からず、半日かかって地名を探索しても見つからない。A博士が存命ならばご本人に聞けるのだが、他界されているため、結局ラベルのない標本として、価値の無いものにならざるを得ないのだそうである。みなさん、ラベルは自分が死んだときを想定してきちんと書くようにしましょう。

また、手元に保存している標本がある方は早めに登録したほうがよいそうである。なぜならば、クモの標本登録に関する予算があと五年くらいと予想されるからだ。

クモの液浸標本はまだ状態がましなほうかもしれない。多足類の標本はすぐに脚が取れてバラバラになってしまう。特にヤスデは惨憺たるものだという。多足類の脚は分類学上の記載には使えないということか。

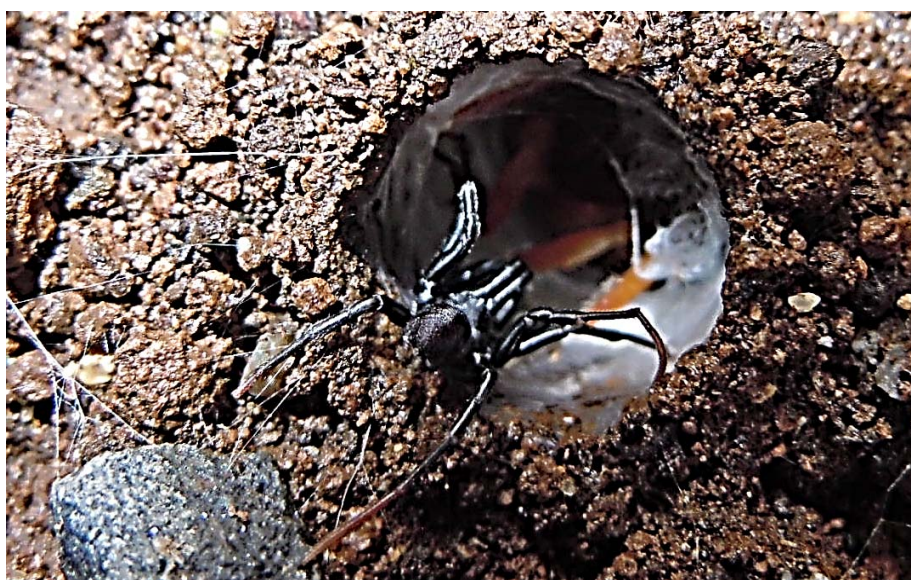
ワスレナグモのオスが、メスの巣穴に入るところを撮影しました

萩 野 穰

2012 年 9 月 16 日の午前 11 時半ごろ、千葉県野田市の自宅の庭で、ワスレナグモの巣穴付近を黒っぽいクモが歩いているのを見つけた。しばらく様子を見てみると、巣穴に入りそうだったので、デジカメで撮影した。巣穴の奥には、メスがいたのも見えた。撮影した画像を父に見せたところ、「黒っぽいクモはワスレナグモのオスで、交接するためにメスの巣穴に入っていくところだろう。触肢の先には既に精液が貯えられているのが分かる」と言っていた。



触肢の先には既に精液が貯えられて



巣穴の奥にメスが見える

CD 日本のクモ

谷川明男



CD 日本のクモを ver.2012 へバージョンアップしました。全体の構成やデザインは ver.2010 と変わりません。五十音順和名索引と分類順学名和名索引とがあり、種名横の map あるいは dic のリンクを選ぶと、該当のクモの写真、県レベルの分布図、分布図の根拠となった文献の一覧、あるいはそのクモの説明が表示されます。

分布図作成のためのデータは、ver.2010 作成後 2012 年 6 月 1 日までに入手した 104 の文献による 4251 件を

追加し、合計で 66548 件です。分布図を収録してある種は 25 種追加で 1576 種、写真が収録されている種は 25 種追加で 853 種です。価格は送料込で 2140 円とさせていただきます。ご購入くださる方は谷川までご連絡ください。

郵便：113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学農学部生物多様性 谷川明男

E-mail：dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

入退会は：事務局 初芝伸吾 186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203
(有) エコシス

E-mail：hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 安田明雄 〒231-0861 横浜市中区元町 5-219

TEL：045-641-0763 E-mail：kobato@gol.com

通信原稿投稿先：谷川明男 247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail：dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4 月総会まで、8 月末、12 月末です。

KISHIDAIA 原稿投稿先：池田博明 258-0018 足柄上郡大井町金手 1099

E-mail：fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp

キシダイアの原稿締め切りは、6 月末日と 12 月末日です。

※ 会員の皆さんからのご投稿をお待ちしております。